

19 日本国特許庁 (JP)

10 特許出願公開

CN

12 公開特許公報 (A)

昭57-199070

51 Int. Cl.³
G 06 F 15 38
3 02

識別記号

庁内整理番号
6913-5B
6798-5B

43 公開 昭和57年(1982)12月6日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 4 頁)

54 かな-漢字変換方法

横浜市港北区綱島東四丁目3番
1号松下通信工業株式会社内

21 特 願 昭56-85134
22 出 願 昭56(1981)6月2日
72 発 明 者 小森田克比呂

21 出 願 人 松下電器産業株式会社
門真市大字門真1006番地
74 代 理 人 弁理上 中尾敏男 外1名

明 細 書

1、発明の名称

かな-漢字変換方法

2、特許請求の範囲

(1) 用字基準を複数個用意するとともに、選択された漢字の候補が用字を制限する上記用字基準に適合するものであるかを判定することを特徴とするかな-漢字変換方法。

(2) 用字基準は、漢字辞書ファイルの各項目毎に項目を構成する漢字の用字基準値を付与させたことを特徴とする特許請求の範囲第1項記載のかな-漢字変換方法。

(3) 用字基準不適合の候補漢字については、フィールド表示または、再度明確表示させることを特徴とする特許請求の範囲第1項または第2項記載のかな-漢字変換方法。

3、発明の詳細な説明

本発明はかな-漢字変換方法に関するもので、お通符の意図通りの文章作成が容易におこなえるようにすることを目的とする。

日本語文章をコンピュータ・システムによって処理するに当っては、文章をシステムに入力する方法が最も大きな問題となる。すでに日本語ワードプロセッサとして商品化された方式としては、文字盤方式によるもの、かな-漢字変換による方式によるものなどがある。

かな-漢字変換方式としては、かな入力文の漢字変換させる部分の前後を、変換用記号によって指示する方法が実用化されており、この入力例を第1図に示す。

この方式で、漢字変換する部分(第1図でCとCで囲まれた部分)を操作者が指定するので、希望の表現が得られる利点があるが、指定記号を入力するわずらわしさがある。

一方、区切記号などをなるべく減らして、読みだけを人力して自動的に、漢字かな振り文に変換する方式も考えられており、べた書き文人力によるかな-漢字変換方式と呼ばれている。この方式は、音声入力により文章入力する場合に特に適した方式である。

特開昭57-199070(2)

3

しかしこの方式は、ある表現を漢字変換するか、かなのままとするかは、変換装置の論理で決定され、著述者の意図通りの文章が生成されるとはかぎらない問題がある。

本発明は上述した問題を改善することを目的とするもので、以下実施例と共に説明する。

第2図はかな-漢字変換装置の基本的な構成を示すもので、1はコンピュータを含む制御装置、2は変換に必要な辞書など、システム・プログラムを記憶している記憶装置、3はかなキー、ファンクション、キーなどを含む文章入力用のキーボード、4は変換結果などを表示する文字表示装置5は変換結果などを出力する漢字プリンタ、6は変換結果を蓄積するための外部記憶装置である。

第1図のよなかな-漢字変換装置において、変換処理の手順の一例を第3図の流れ図に示す。この流れ図では非変換文字を入力する状態から処理を始める手順が示してある。第1図のCのような変換指定記号(第3図では変換記号と略記してある)を手掛りとして、変換対象のかな文を抽出

し、この読みに該当する漢字または熟語を、漢字辞書ファイル中から検索する。一般に同音語が複数存在するので、それらを順次表示し、正しい漢語が得られれば、次の文の入力に戻る。該当の語がなかった場合は、入力文のままを変換結果とする。

漢字辞書ファイルは一般に大きな容量を必要とするので、第1図の記憶装置2に記憶されている。入力文字列および変換結果は文字表示装置4に表示される。表示装置4によって変換の正誤の確認および、文章の訂正、編集などを便利に行なうことができる。

所て日本語の表記については、文書の目的によって、各種の用字基準の使い分けが必要となる。基準の例としては、常用漢字、教育用漢字、常用漢字などの用字範囲の制限、また、「公用文作成の要領」といった用法の基準などが存在する。

従って、特に前述のべた書き文入力による変換方式のような場合には、用字基準に従った変換を行なうために、何らかの対策が必要となる。この

5

対策を施した本発明の実施例について第4図と共に説明する。

第4図は第3図の⑩のステップ以降を修正したものである。第3図と同じ過程で漢字辞書ファイルから候補の文字または熟語がとり出されたあと⑪に入り、用字基準の指定がある場合は候補の文字が、指定の用字基準に合致するかどうかを、一文字ずつ調べる。具体的には各基準に合致する漢字のリストなどからなる用字基準表を用意し、これを検索することによって行なう。

補文字中、基準不適の文字は、表示を白黒反転するなどによって操作者に知らせるようにし、操作者は、装置の編集機能を用いて、不適文字をかなに戻すなどの修正操作を行なう。なお、他の同音語候補がある場合に、選択された候補文字を点滅表示することは一般に行なわれており、黒色反転はそれと両立するための一つの案である。

この場合、漢字辞書ファイルの各項目(文字または熟語)ごとに、用字情報を与えておくことも辞書の構造によっては考えられるが、これに示し

6

たように、用字基準表を別に持つ方が、一般に記憶容量が簡減される。また、用字不適の場合に、不適の文字だけをかなに戻すか、それが熟語の一部であった場合に熟語全体をかなに戻すかは、選択の余地があり、本実施例では、操作者の手操作で直すこととしている。熟語全体をかなに戻す方針の場合は手操作でなく自動処理することは容易である。

なお、用字基準の指定方法としては、入力装置上に、専用の指定スイッチを設け、これを、制御プログラムで参照する方法、あるいは、全品形式によるメニュー選択コマンドによる方法などを用いることができる。

なお、固有名詞については、用字基準を適用しないので、別扱いとすることは、固有名詞の指示手段を設けることにより容易に実現される。

以上の説明から明らかなように本発明によれば著述者の意図に基いた用字選択が可能となるので字句修正の手間が低減して、作業効率が向上される。特に、漢字が多用されて、用語集も作成される

特開昭57-199070 (3)

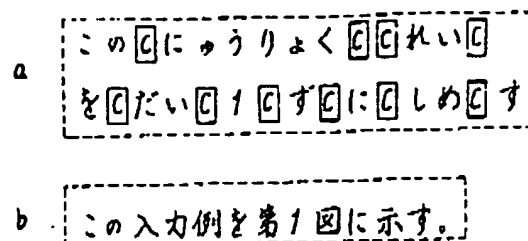
うな傾向を防ぐためにも有効である。また、本発明は、べた書き文入力方式の場合にかぎらず、本実施例で示したような、変換指定方式の場合でも同様の効果が得られる。

4、図面の簡単な説明

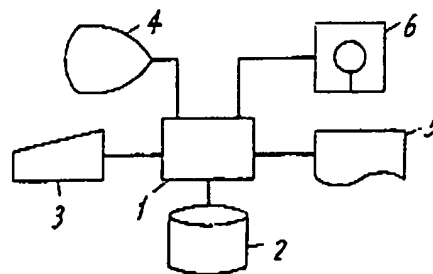
第1図は変換指定記号によるかな-漢字変換の入力方法の一例を示す図、第2図は一般のかな-漢字変換装置のブロック図、第3図はかな-漢字変換処理手順の一例を示す流れ図、第4図は本発明の一実施例におけるかな-漢字変換方法による流れ図である。

代理人の氏名 弁護士 中 尾 敏 男 ほか1名

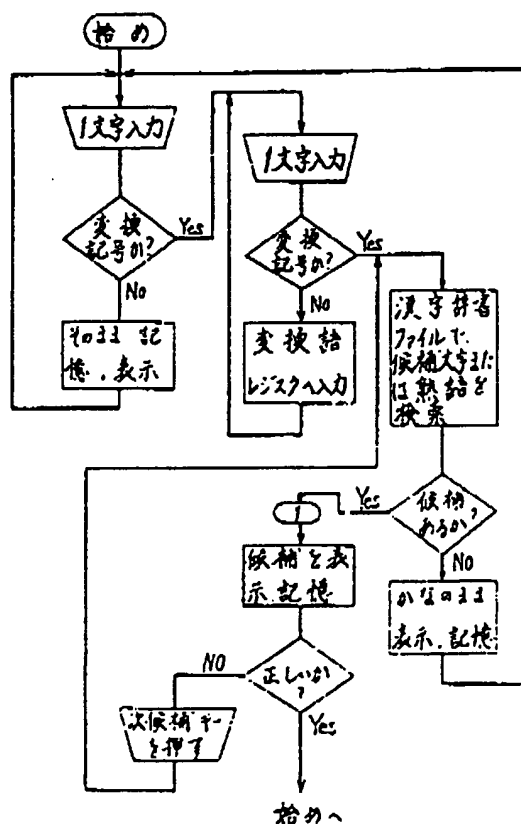
第 1 図



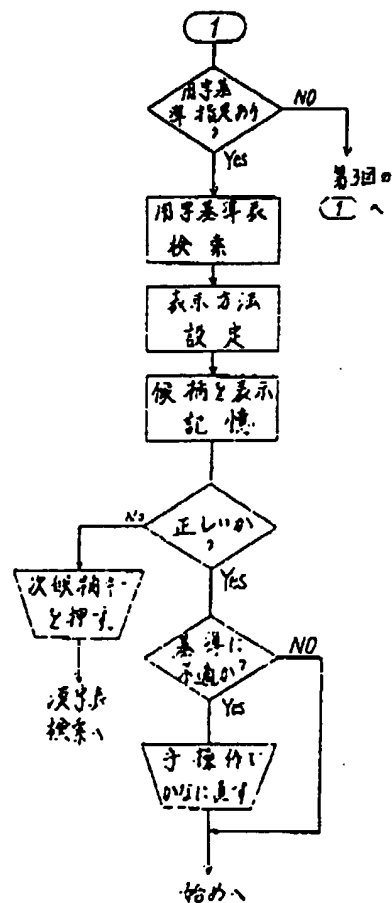
第 2 図



第 3 図



第 4 図



特開昭57-199070(4)

手続補正書

昭和56年9月28日

特許庁長官殿

適

1 事件の表示

昭和56年特許願第 86134 号

2 発明の名称

かな-漢字変換方法

3 補正をする者

特許出願人
 住 所 大阪府門真市大字門真1006番地
 名 称 (582) 松下電器産業株式会社
 氏 名 山 下 俊 彦

4 代理人

〒571

住 所 大阪府門真市大字門真1006番地
 松下電器産業株式会社内

氏 名 (5971) 弁護士 中 尾 敏 男
 (ほか1名)

(本特許 電話(06)437-1121(特許分室))



5 補正の対象

明細書の発明の詳細な説明の欄



6. 補正の内容

- (1) 明細書第6頁第11行目の「補文字中」を「後補文字中」に訂正します。
- (2) 同第6頁第16行目の「黒色反」を「白黒反」に訂正します。
- (3) 同第6頁第16行目の「指手」を「指定」に訂正します。